

65. トルコ共和国アンカラ新首都建設における近代都市計画技術の受容

Acceptance of modern city planning skills on the new capital construction in Republic of Turkey

土田哲也*・土肥真人**
Tetsuya Tsuchida, Masato Dohi

After the independence in 1923, Turkish government introduced Western system and technology to modernize its own society. The new capital, Ankara was constructed as a part of such modernization policy and city planning skills brought by foreign urban planners was also accepted. The purpose of this study is to grasp the modern city planning skills from the adaptation process to traditional town in Turkey, and to think over the significance of the new capital construction in the modernization of Turkey. The findings are as follows: 1) City planning skills accepted in Turkey achieved to build a vast new city area, but pre-modern space and society still remained in the city heart of Ankara. 2) Through the construction of new capital Ankara, it was successful in elimination of previous space control systems and administrative machinery to provide modern ones.

Keywords: New Capital Construction, Modernization, Modern City Planning, Turkey, Ankara
新首都建設、近代化、近代都市計画、トルコ、アンカラ

1 研究の背景と目的

トルコ共和国は1923年の建国以来、西洋を規範とした新しい制度や技術を導入して、旧来の体制を一新しようと試みる。そうした近代化政策の一環として、新しい国家像を象徴する新首都の建設が行われた。首都建設にあたっては、初代大統領 Kemal Atatürk(1881-1938)の要望に応える形で、西洋の専門家により都市計画案の作成がなされた。彼らの計画案はトルコの政府官僚、政治家といった人々が判断、解釈したのちに受容され新首都の建設は実行に移されていた。建国から5年という短い期間に2度の都市計画案の提示が行われ、その都度西洋の技術を受容し、最終的に西洋の専門家とトルコ人の協働により実施案を作成した新首都アンカラ¹⁾の建設の過程は、トルコ近代化の過程を鮮明に表すものである。

本研究ではアンカラ新首都建設に際し西洋の専門家によって計画案、実施案の作成が行われた1924年から1932年までを対象として、1)アンカラにおける都市計画案の詳細および2)計画案を実行に移すまでの過程を把握し、3)トルコ共和国の近代化におけるアンカラ新首都建設の意義について考察することを目的とする。

本研究に関連する先行研究としては、共和国期初期アンカラの公共空間の整備に関するもの¹⁾、トルコの近代化とイスラム主義の相克に関するもの²⁾などの研究が行われている。しかし、アンカラ新首都建設に関してその計画案の詳細を明らかにしたものや、都市空間の整備を国の近代化に関連して考察を行った研究は見られなかった。また、わが国におけるトルコ研究の中で共和国時代を題材としたものは、寺坂らによる著書³⁾などがあるものの、オスマン帝国期を題材としたものと比較すると十分に研究がなされているとは言いがたい。

2 アンカラ首都建設計画の位置づけ

2.1 共和国期以前の都市管理手法

トルコ共和国の前身とも言うべきオスマン帝国において都市空間の管理に大きな役割を果たしたのがワクフ(Wakıf)制度であった。ワクフとはイスラム法に基づく宗教寄進行為である。寄進者が自己所有の特定財産の処分を永久に停止し、ワクフ管財人にその財産の管理を委ね、原則的に公共、慈善、宗教的な使途を寄進目的にして、社会や受益者、もしくは自己の為に使用、収益を与えることを取り決めた契約であった⁴⁾。ワクフに関わる建造物には、宗教・慈善施設など寄進対象である「ワクフ施設」と、バーザールや公衆浴場といった商業・営利施設などワクフ施設の財源「ワクフ財源」があり、両者はしばしばセットで建設されていた⁵⁾。ワクフ施設には建築物の他、街路や引水路なども含まれる。この制度を用いて都市施設を建設したのは、宗教、政治の両面で頂点に立つスルタンから政府高官、都市民に至る多様な階層の人々であり⁶⁾、ワクフ制度及びそれによって建設された施設は社会構造の基盤を構成していた。

2.2 タンズィマートによる西洋からの都市計画技術取得

オスマン帝国は19世紀後半からタンズィマート⁷⁾(Tanzimat)と呼ばれる近代化政策に着手し、その一つとして都市の改良を行った。帝都イスタンブルを舞台に展開した都市改良のために西洋諸国から外国人技術者が登用された。彼らを通して近代都市計画技術がトルコへもたらされることとなったが、その対象は火災発生地区に限られ、断片的な街路の改良や建物の不燃化事業が中心であった⁷⁾。

2.3 共和国期アンカラの都市計画史

トルコ共和国誕生以降に行われたアンカラ新首都建設は、新たな都市のデザインを目的としたこと、都市全体を計画範囲としたことで、オスマン帝国期の都市改良とは一線を

* 正会員 独立行政法人都市再生機構 (Urban Renaissance Agency)

** 正会員 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻 (Tokyo Institute of Technology)

表 1 共和国期アンカラの都市計画史

年	計画	制度・組織
1923		トルコ共和国成立 アンカラに首都が移される
1924	Lörcherの首都建設計画	アンカラ市当局設置
1925		583号法令(土地収用法)
1928	アンカラ首都建設計画コンペ	アンカラ開発局設置
1930		都市法、公衆衛生法
1932	Jansen計画の実行案作成	
1955	トルコ人計画家による 第二次首都建設計画	
1969	第三次首都圏開発計画	アンカラマスタープラン局設置

画すものである。アンカラでの都市計画の進展を表1に示す。1924年に作成されたLörcherの計画は一部を実施したのち放棄され、新たな計画のために1928年にコンペが開催された。審議の結果ドイツ人建築家Jansenが優勝、1932年に実施案が作成され実行に移された。1955年にはトルコ人都市計画家Nihat YucelとRasit Uybadinによる第二次首都建設計画が策定されるが、Jansenが本国に帰国する1939年までが外国人専門家による都市計画策定の時代である。

3 Lörcherの首都建設計画

3.1 計画策定の経緯

1923年にアンカラ市が新しいトルコ人国家の中心となることに関する法律(Ankara'yı Hükümet Merkezi yapan kanun)が可決される⁶⁾。トルコ共和国政府はオスマン帝国との決別、そして西欧諸国に国力を示すために、この中部アナトリア地方の小都市を首都にふさわしい近代的な都市として整備する必要があった。同年首都建設計画案の作成がトルコ建設株式会社(Keşfiyat ve İnşaat Türk Anonim Şirketi)に委託される。実際に計画を策定したのがそこに勤務するドイツ人建築家Carl Christoph Lörcher(1884-1966)⁴⁾であった。

3.2 計画の内容

アンカラに対する初の都市計画案であるLörcherの計画(図1)を1)街路計画2)緑地計画3)その他衛生施設4)土地利用計画5)旧市街地の取り扱いを基準として分析を行う⁶⁾。分析資料は表2に挙げたものである。

1) 街路計画

Lörcherは、主要幹線街路とそれ以外の街路を明確に区別し、その重要性に序列があり、それぞれに見合った機能があることを述べている。主要街路は「都市の中心への交通を保証するために直線的で、一等街路としてその責務を果たすものでなければならぬ」⁹⁾と、街区内街路は「短く、住居の密度を適切に配置するものであり、敷地や建物に清潔な空気や光を保証しなければならない」¹⁰⁾と考えた。

実際の街路の設計計画では南北及び東西方向の幹線道路

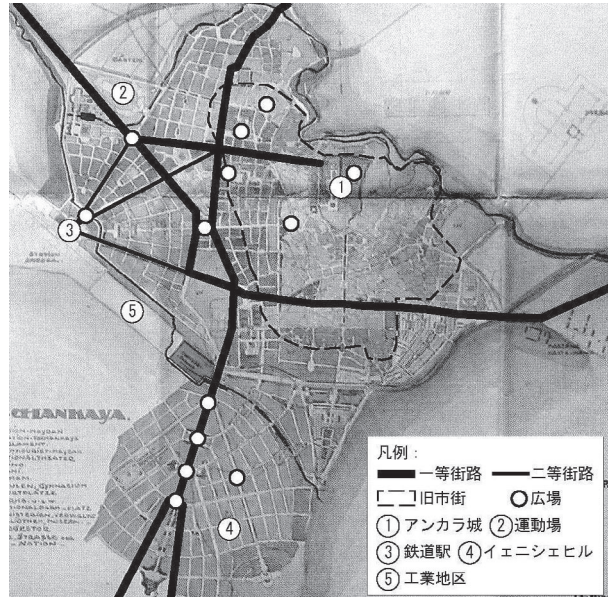


図1 Lörcherの首都建設計画⁸⁾

を都市軸として設定している。これらの一等街路は都市内交通の最重要街路であると共に、都市間交通流の根幹となる街路でもあった。また、一等街路を補助すべく、市街地西方の鉄道駅から都市の中心へと続く二等街路が鉄道駅を中心に放射状に配置された。街区内道路に目を転じると、旧市街南部に計画されたイェニシェヒル(Yenişehir)地区や、旧市街地の西部地区といった新たに整備される地区では、基盤目状、放射同心円状の街路網の建設が予定された。旧市街内部の複雑な街路網を整理する試みの跡が見られる。

2) 緑地計画

1924年の首都建設計画では広場を配置することが計画された。これらの広場は、都市に美観や威容を与え新たな首都に見合う空間を整備することを目的としていた。アンカラを訪れる外国人も考慮に入れられ、プールが広場の中心に置かれるなど華やかな空間となっている。

一方で公衆衛生の観点から新たな都市施設を配置することの必要性を彼は指摘する。1905年マンハイムにおけるドイツ公衆衛生保全委員会の会議で策定された原則⁶⁾を引用し、運動競技場を配置したほか、都市の様々な場所に空地を確保し、それを休息や運動に利用することを提案している。また、「緑地の配分システムは、都市計画家が考えるべき最も重要な責務である」¹¹⁾と述べ、河川を緑地帯の基礎として設定し、都市を縁取る緑地帯を計画していた。

3) その他の衛生施設

Lörcherの首都建設計画において都市衛生の改善に関す

表 2 Lörcherの首都建設計画に関する文献

No.	資料名	作成者・著者	出版年	媒体	備考
1	Ankara Şehirin İmâr ve İnşâ Planına Âid İzahnâme(アンカラの都市建設計画に関する計画書)	Lörcher	1924	計画図書	1924年アンカラ首都建設計画に関する解説書
2	1/4000 ölçekli Ankara Şehri Haritası(1/4000 アンカラ市図)	国防省地図局	1924	計画図面	1924年当時のアンカラの地図
3	Bebauungsplander Türkischen Haupt und Residenzstadt Angora(トルコ人たちの首都アンカラの計画)	Lörcher	1925	計画図面	旧市街の計画図面
4	Regierungs Stadt: Entwurf und Ausführung(政府街区の計画とその実施計画)	Lörcher	1925	計画図面	新市街の計画図面
5	Plan zum Aufbau der Türkische Hauptstadt-Angora-Alstadt und Regierungstadt = Tschankaya (トルコ人の首都アンカラの計画: 旧市街と行政地区チャンカヤ)	Lörcher	1925	計画図面	新旧両市街地を対象とした広域計画図面
6	Der Neue Bebauungsplan Für Angora(アンカラのための新開発計画)	Lörcher	1925	雑誌記事	
7	Das Neue Regierungsviertel der Stadt Angora(アンカラ市の新政府街区)	Lörcher	1925	雑誌記事	
8	Angora und Sein Neuer Bebauungsplan1(アンカラとその新開発計画1)	Lörcher	1925	雑誌記事	
9	Angora und Sein Neuer Bebauungsplan2(アンカラとその新開発計画2)	Lörcher	1925	雑誌記事	

表3 アンカラ市当局の組織の変遷 (一部)

1924-1926	1927	1928
アンカラ市当局 公園局 科学局 道路支局 建設支局 地図支局	アンカラ市当局 公園局 科学局 道路支局 建設支局 地図支局 単独の局に格上げ	アンカラ市当局 公園局 科学局 道路支局 建設支局 地図支局 新設 アンカラ開発局

る施設は、運動場及び空地がすべてであり、その他の衛生施設についての言説は見られなかった。

4) 土地利用計画

土地利用に関連して、空間の密度を制限し建物の高さを低く抑え、衛生的に都市を整備することを提案している。そのためにそれぞれの地区ごとに建物の階数の限度を設定した。中心地区では三階建までが、それに隣接する地区では二階建までが許容されており、高密の開発地域を形成した。それとは対照的に周辺の地区では二階建までが許容され、二階建の建築物が建設される場合にもその形態は戸建のものに限定されており、低密の開発地域を形成していた。そして鉄道駅の南東に工業地区が設定された。また屠殺場はアンカラ周辺の三本の川が合流する地点へ、刑務所は農地周辺へと、迷惑施設は都市の外側に再配置された。

5) 旧市街の取り扱い

これまでに明らかにしたように、旧市街地内での街区区道路、旧市街地を通る主要街路、広場の建設が計画されており、新首都建設計画には旧市街の改良が計画に含まれていた。歴史的建造物にも焦点が当てられ、1428年に建設されたハジュ・バイラム・モスクやローマ時代のアウグストス神殿の保存を行うとともに、これらの建築物の意味を強めるために近傍に広場や街路を整備することを計画した。

3.3 計画実行体制の整備

アンカラ新首都建設の過程で、1924年にアンカラ市当局(Ankara Şehremaneti)が、1928年にはその中にアンカラ開発局(Ankara İmar Müdürlüğü)が設置される(表3)。これらは都市空間を計画、整備、管理する、社会的諸制度の執行機関である行政機構であり、組織の構成や職務の内容に対して中央政府の強い統制を受けた。同時に、これらの組織がアンカラに作られたことは、同様の組織をトルコ国内の他の都市にも誕生させ各自に開発計画を作成させるためのさきがけとしての意味を持っていた¹²⁾。

1924年に策定されたLörcherの都市計画案を受けて、1925年に土地収用に関する法令(法令583号)が制定される。この法律は市当局に土地収用の特別権限を与え、旧市街の南に広がる400haの土地が国有化されることとなった。計画案に基づく首都建設のため大量の更地を入手すること、首都移転に伴う住民増加に対処することがこの法律の制定理由であった。土地の収容に当たって1915年の土地台帳に記載されている課税価格の15倍までを限度額として補償がなされることとなった。同法令を巡る国民議会での答弁では、国会議員からワクフ制度が管理していた都市空間を市当局が一元的に管理することや、都市計画を新市街だけ

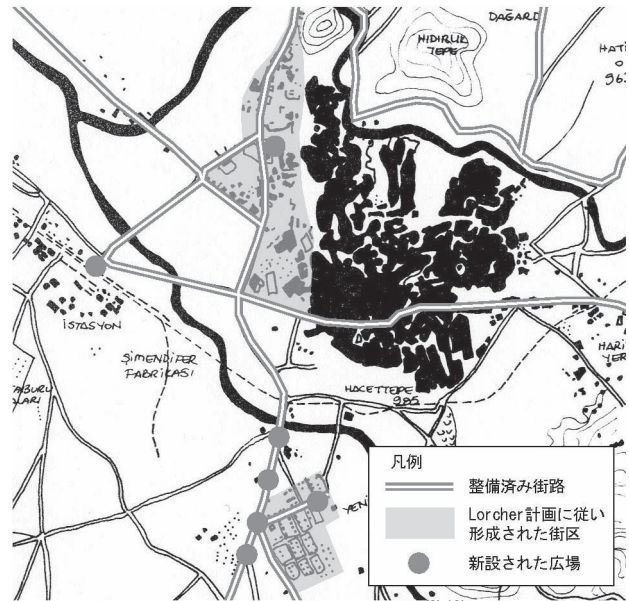


図2 Lörcher 計画適用の様子^{8) 13)} (1926年)

でなく旧市街に対しても適用することが主張された⁷⁾。

共和国最初期の組織、法律の編成はワクフ制度を形骸化させ、多様な人々によって構成されていた都市空間を近代的な行政機構が一括して統治するためのものであり、また社会それ自体を近代化しようとする試みであったといえる。

3.4 計画の実行とその放棄

1926年のアンカラの地図(図2)からはLörcher計画がいかに行われたかが把握できる。Lörcherが都市の軸線とした東西、南北方向の一等街路や、鉄道駅から市街地へ向かう道路など、主要街路の整備がまず行われた。南北方向の一等街路に沿って、旧市街地西側の火災跡地の公共建築群やイエニシェヒル地区が造成された。また広場の整備も進められた。広場の中心には記念碑や噴水が据えられるなど、近代都市を象徴するモニュメンタルな空間が誕生した。しかし、新首都建設計画はイエニシェヒル地区では着実に実行に移されつつあったものの、旧市街周辺での適用は思うようには進まなかった。特に街区区道路の整備は、イエニシェヒル地区を除いてほとんど行われていない。Lörcherの計画に基づく新首都建設は、荒地に新しい都市を建設することには成功したが、トルコの建国エリート達が思い描く旧来の都市空間の改変までは至らなかった。

その原因として、土地収用法が旧市街を対象としていなかったという制度的な問題と、その背景となる経済的な問題が挙げられる。当時のアンカラ市当局には、既成市街地のような土地価格の高い場所に対して補償金を支払うだけの財政的余裕がなかった¹⁴⁾のである。結果として、旧市街内部で土地投機が生じ、計画が無いままに都市市民による開発が進んでいった¹⁵⁾のに対して、市当局は対策を講じることが出来なかった。また、Lörcher計画は将来の人口を25万人と見込んでいたが、急速な人口増加に際して収容すべき人口に見合うだけの市街地、住宅を整備する余裕は無かった。こうした問題のためにLörcherの計画は適用の中止を余儀なくされ、新たな都市計画案が求められた。



図3 Jansen案¹⁶⁾



図4 Jaussely案¹⁷⁾

を分割する空地の配置を意味するものだった。多様な意味を持つ街路のために、街路の勾配及び長さや幅員に関する規則を設けた。彼の計画案(図4)では都市の中心で直線的な街路が見られるのに対し、居住地区においては自由な曲線と円環により街路網が構成されている。街区を様々な形に切り分けるよう街路を配置し、変化に富んだ風景を創出している。

Brixは、Lörcherが南北の都市軸に設定した主要街路を鉄道路線と立体交差させることのほか、交通流の整理のためにロータリー式交差点の導入を計画していた。ただし計画の解説書やトルコ政府への報告の中で、街路配置の規則に関する言説は見られなかった⁽¹²⁾。

4 アンカラ首都建設計画コンペ

4.1 コンペ開催の経緯

Lörcherの計画の後、新たな都市計画を策定する必要に迫られたアンカラ市当局は、1927年に職員をドイツに送り、ベルリン市当局と大使館の案内によってシャルロッテンブルク大学のHofman教授と接触した。しかし彼は、当時75歳の高齢でありアンカラ訪問が不可能と考えたために、アンカラ首都建設計画の策定に同大学で教鞭をとるHermann Jansen(1869-1945)⁽⁹⁾とJoseph Brix(1859-1943)⁽¹⁰⁾を推薦する。この2名にフランス人建築家Leon Jaussely(1875-1932)⁽¹¹⁾を加えた3人の専門家の提案のうち、最も優れた計画案を採択することが決定される。三者は1927年7月にアンカラを訪問し、都市を調査し議論を重ねた。1928年アンカラ市当局より首都建設計画に関する条項や資料を与えられ、同年首都建設計画コンペが開催された。

4.2 計画の内容

本節では1928年に開催されたアンカラ首都建設計画コンペに参加した三者の計画案に関して、3.2と同様の基準に基づき考察する。分析に用いた資料は表4にまとめた。

1) 街路計画

Jansenの計画案(図3)はLörcherの計画を一部引継ぎ、南北及び東西方向の街路を一等街路として設定している。これらの街路を主軸とし、既存市街地を取り囲む環状街路と放射街路の二等街路が配置された。基礎街路配置の規則は、居住地区への太陽光の保証、可能な限りでの道路建設の最小化の二点に纏められる。結果、幹線道路とそれに直行する基礎街路で街路網は構成され、細長いブロック状の敷地が誕生した。またLörcherの計画と比較して、旧市街内の街路整備の規模は縮小された。Jausselyにとって街路の整備は都市美、交通の保障、都市衛生の改善、居住地区

2) 緑地計画

緑地を公衆衛生の改善及び休息や体力増強のために配置したことは三者に共通し、Lörcherの計画の系譜を継ぐものであるが、より発展した都市計画技術も各自の案に見られる。Jansenにとって緑地配置の第一義の目的は、都市の密度や配置を規制することであった。既存市街地を囲むように配置された各地区を分断するように緑地が配置されている。彼の計画では緑地計画は土地利用計画と不可分だった。

一方Jausselyは公園、広場、庭園の間の距離を規定しており、そこには緑地を都市内に満遍なく分散させようという意図を読み取ることが出来る。さらに配置された広場や公園は植樹を施された並木道によってそれぞれ結ばれており、街路計画と緑地計画の間に関連性があったといえる。

3) その他の衛生施設

計画図書の中で上下水道網の整備に関して多くの紙面が割かれている。Jansenは下水道網に焦点を当て、雨水と汚水を別々に輸送することを計画している。その理由は双方を一つでまかなうには高価な下水施設が必要であったからである。整備費用に関する配慮は他にも見られ、都市の拡大に応じた段階的な下水道網整備を提案している。

Jausselyは乾燥した土地であるアンカラで、水を有効に使うという観点から、上水道や浄水所の整備に主眼を置いている。総距離160kmに及ぶ水道網は、アンカラの地形を考慮し分散して配置された。

給排水を専門としていたBrixの首都建設計画の中心となるのがこの部分である。彼はJansenと同様に雨水と汚水の輸送システムを計画したほか、ダムを整備しそこで得られる水を利用した公衆浴場や洗濯場を構想していた。

表4 アンカラ首都建設コンペ案に関する文献

No.	資料名	作成者・著者	出版年	媒体	備考
1	Ankara Şehrinin Profesör M. Jaussely, Jansen ve Brix tarafından yapılan Plan ve Projelerine ait İzahnameler (Jaussely, Jansen, Brix教授により作成されたアンカラの計画及びプロジェクトに関する解説書)	アンカラ市当局	1929	計画図書	首都建設コンペに参加した三者の計画解説書集
2	Ankara'nın Umumi İmar Planı(アンカラの総合開発計画)	Jansen	1927	報告書	Jansenが計画の概要をアンカラ市当局に報告した文書
3	Prof Beriks'in Ankara için Hazırlayacağı Gelişme Planı İçin Yaptığı Tedkikata dair Rapor (アンカラ開発計画のために行った調査に関するレポート)	Brix	1927	報告書	Brixが計画の概要を内務省に報告した文書
4	Ankara Gesamtbebaungsplan(アンカラ全体開発計画)	Jansen	1928	計画図面	Jansenの都市計画図面
5	Angora Flächenaufteilungsplan(アンカラ全体土地利用計画)	Jansen	1928	計画図面	Jansenの土地利用計画図面
6	Plan dela Ville D'Angora(アンカラの計画)	Jaussely	1925	雑誌記事	Jausselyの都市計画図面

表5 コンペ案の選考基準

近代的な空間装置の整備	既存都市施設の配置	秩序ある開発と住宅の保証	計画の適用可能性
<ul style="list-style-type: none"> ・公園、湖、広場 ・運動場 ・下水道 ・街路と敷地の整備形態 ・街路の方向と状態 ・都市的美的な要素 ・工業地区 	<ul style="list-style-type: none"> ・市場 ・鉄道駅と鉄道路線 ・屠殺場 ・墓地 	<ul style="list-style-type: none"> ・旧市街の解決 ・新市街の解決 ・政府役人や公務員の住居 ・労働者街区と住居 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画の適用可能性

4) 土地利用計画

Jansen と Jaussely の両者はともにアンカラ市街地全体を個別の地区に分割し、それぞれに居住、商業、工業、官庁街といった用途を指定している。そのほかにも Jansen は土地利用の一つのパターンとして空地を指定し、その用途は公園のみならず、学校等公共建築の用地としても設定していた。また Jaussely は建築物の階数を指定したほか、建築物の高さ H を街路の幅員 L を用いて規定したり、建蔽率を指定することで密度の規制を行っていた。

Brix の土地利用計画は Lörcher の計画に類似するものであり、アンカラ城への眺望を確保するために、建築物の階数の規制をその手法としていた。

5) 旧市街の取り扱い

旧市街の取り扱いからは三者それぞれに異なる考えが見取れる。Jaussely は「旧市街を完全に改変することが必要である……なぜなら旧市街を今のまま残すことは中央政府及び新市街を不潔なものにしてしまうからである」¹⁸⁾と述べ、古い都市構造を一新することを目指していた。

Brix はアンカラの旧市街を都市全体の中でも重要な場所として位置づけ、その形態に手を加えないことを明言している。彼は南方に都市はいくらでも拡張することが可能であり、そこを開発することによって都市の整備は満たされていると考えていた。つまり旧市街は彼の計画案の計画範囲からは外れていたといえる。

Jansen の計画はそれらの中間に位置するものである。「アンカラ城は文化的、政治的に国民の基礎を築く」¹⁹⁾とし、新たに整備される都市空間を、アンカラ城を中心としてその周囲に配置している。旧市街内部では、アンカラ城を望むための街路や広場といった空間装置を挿入することでその空間を改良しようと意図していたが、その空間変更の規模は Lörcher 案と比較して小さくなっていた。

1924 年の Lörcher の首都建設計画と比較すると、1928 年に開催された首都建設コンペで提出された案では、給排水システムなど以前の計画では扱われていなかった新しい都市計画技術が導入されていた。また、街路、緑地、土地利用計画間の相互関係が強化され、より厳格な都市を構成する論理が構築されていたことが見て取れた。

4.3 計画案の評価

コンペ案の選定のために審査委員会が組織された。委員はすべてトルコ人であり、大学を卒業しドイツ語やフランス語の教養のある者たちがトルコ各地から集められていた。全委員半数が国会議員によって占められていたほか、政府官僚の参画も見られる。彼らが計画案を採択したことは、

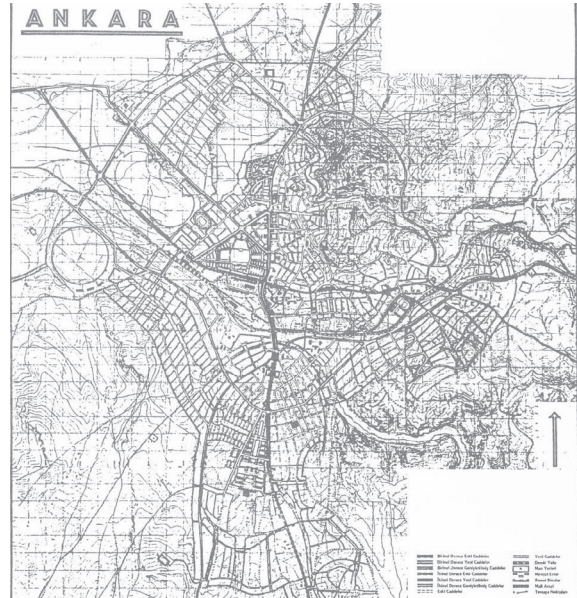


図5 Jansen 計画実施案²¹⁾

計画立案の権限を持つアンカラ開発局が設置された後も首都建設に関して中央政府による強い介入があり、アンカラ開発局の機能に影響を与えていたことを意味する。

首都建設計画コンペ審査委員会の 16 の選考基準が Tankut によって明らかにされている²⁰⁾。これらの選考基準から、審査委員会の計画案に対する評価の枠組みは 1)近代的な空間装置の整備 2)既存都市施設の配置 3)秩序ある開発と住宅の保証 4)計画の適用可能性の 4 つに分類される⁽¹³⁾ (表 5)。これらの選考基準には、Lörcher 計画実行の過程で把握された問題点を克服するために必要なことが盛り込まれていた。当初アンカラ首都建設は近代的な国家にふさわしい都市を建設する事を目的としていたが、コンペ開催時にはそれらに加え Lörcher の計画で扱われていなかった新たな都市計画技術を取得する、秩序ある開発を行う、適用可能な計画を策定する、という新たな理念が建国エリートらによって共有されていた。

4.4 コンペの結果とその後

コンペ案審査の結果、人口の増加に応じた段階的な整備手法を提案するなど、計画書の中で計画の経済性に言及していた Jansen の計画案が第一位を獲得し実行へ移された。1932 年までに Jansen とアンカラ開発局の協働で実施案 (図 5) が作成されている。この実施案では旧市街地区の開発に関して大きな変更が加えられ、アンカラ城周辺地区では開発行為が禁止され、保存されることとなった。

旧市街を開発することで新市街と接続しようとした首都建設コンペ案での考えから大きく方向を変え、旧市街に対して保護主義あるいは分離主義といえる態度が実施案から見て取れる。旧市街を保存した理由として土地収用法がその適用範囲に旧市街地区を含んでいなかったことが指摘されている²²⁾。計画の実行可能性を重んじる Jansen は早急な都市構造の変更が困難な旧市街に対し無理に計画を策定して、顕在化していた土地投機問題が悪化することよりも、当面の間保存し時期が来たのちに適切な注意を払って新旧

の市街地を接続する道を選んだのである。

旧市街通達(Eski Şehir Talimatnamesi)の制定により、アンカラ旧市街の東側は主要街路を通す以外すべての開発を禁止したプロトコル地区に設定される。かつて Jansen が近代都市アンカラの中心として位置づけたアンカラ城周辺は、空間改変の対象から外されることによってオスマン帝国期あるいはそれ以前の都市構造をそのまま残すこととなった。

5 新首都建設とトルコの近代化に関する考察

西洋的、近代的な国家にふさわしい首都の都市空間を整備するためにはじめられたアンカラ新首都建設は、その実行のためにアンカラ市当局を設置した。アンカラ市当局はその組織編成の過程で、都市の建設、計画策定と活動領域を拡大させる。オスマン帝国期にワクフ制度によって管理されていた都市施設のうち、宗教に関連する施設は中央政府が直接管轄し、それ以外の施設は市当局が管理することになった。中央政府を頂点とする行政機構は都市空間を一元的に管理し、トルコの建国エリートらが望んだワクフ制度の解体に成功するのである。また Lörcher 計画を実行することによってコンペ案の選考基準に見られるような、都市を計画、整備する際の新たな理念も形成されていった。

一方空間はどのように改変されたか。Lörcher の計画案は旧市街の改変を含めて近代的な都市空間の整備を目指し、広場や秩序立った街路網など、近代的な都市をデザインする。しかし、経済的な問題や都市計画技術およびそれを支える制度の不足によって、旧市街の改良は思うように進まない。さらに土地投機の増大により無計画な都市の開発が目立つようになり、これに対処することが必要となった。トルコの国会議員らによって選ばれた Jansen の計画は、街路の配置に際して建設費用を抑え、緑地を空地地区として土地利用計画に取り込むなど、Lörcher の計画あるいは他のコンペ参加者の案に比較してより洗練された都市計画技術に基づくものであり、当初よりもはるかに広大な、近代的都市空間を創出させることに成功する。しかし新市街の整備は、旧市街の改良の一部を保留することによって成し遂げられたのである。

近代的な都市空間の創出を目的としたアンカラ新首都建設は、旧市街を保存せざるを得なかった点で本来の目的を完全に達成することは出来なかったが、都市計画技術の受容を通して近代的行政組織や、都市の管理制度といった社会的諸制度を近代化させることに成功したといえる。

6 結論

本研究では当時の文献よりトルコ共和国の首都アンカラの建設過程や計画案を明らかにした。その結果、トルコは近代都市計画技術を受容することによって近代的な都市空間を整備したが、旧来の都市構造の一部は取り残されたこと、本来の目的である空間の刷新は一部保留したものの、アンカラ新首都建設を通じて行政機構や都市管理制度の近代化が成し遂げられたことが明らかになった。

補注

- (1) アンカラの起源はBC4000 頃ヒッタイトの時代といわれ、その後都市域はアンカラ城の西方へ、13C 以降トルコ民族の時代には南方へ拡大した。この時代までに建設された市街地は、中心部にモスクと商業地があり、その外側の居住地内には不整形で迷路状の街路が走るというイスラーム都市的な性格を示している。20C 初頭のアンカラは「荒廃した小都市」と称されるように産業の停滞などを理由に都市から活気が失われていた。当時の人口は約30,000人程度であった。
- (2) 1839年11月、レシト・パシヤの構想に従った改革方針が新帝の勅令という形式で発表されたギュルハネ勅令から始まる一連の改革運動をタンズイマート改革と呼ぶ。Tanzim はアラビア語起源で「調整」を意味する。制度の西欧化と近代化の推進を目指す、そのたびに伝統的な制度や社会の実態との整合性が問題となる。
- (3) アンカラが首都に選ばれた理由としては1920年、西欧列強に対して決起したトルコ人の抵抗政権がこの地に樹立したこと、オスマン帝国の首都イスタンブルと距離がありオスマン朝の残存勢力の影響が少なかったことがあげられる。
- (4) Lörcher のトルコにおける仕事はアンカラ首都建設が初めてではない。タンズイマート改革期に外国人専門家として登用され、西洋列強諸国の居留地の火災復興計画を策定した実績があった。
- (5) 街路、緑地、土地利用の計画は、計画書の中で項目立てて取り上げられ、後のコンペ案でも同様に扱われていた。衛生施設は Lörcher 計画では深く掘り下げられなかったが首都建設コンペで大きく発展する。旧市街の取り扱いについては雑誌記事の中で繰り返し触れられていた。これらの項目は今日においても計画の分析基準としての妥当性を保持していると考えられる。以上を理由に分析基準を設定した。
- (6) 「身体的な発展を保証するために若者の秩序ある最大限の運動は生活に必要なものである」文献1)p.154
- (7) 1924年12月13日国民議会での Muhtar Bey の発言。「昔は市当局の組織がなかったため水道や墓地はワクフが扱うこととなりました。今日では墓地や水道をワクフとして扱うのは時代遅れであります……アンカラに必要な改良は、今ある都市の開発です。この大きな都市を残して他の場所を開発すること、旧市街の無視は適当ではありません。」
- (8) 原図は1928年の地図を基に Şenyapılı が作成したものである。
- (9) ドイツ人建築家、都市計画家。アーヘンの工業学校で建築を学んだ彼は、プロシア帝国の都市計画アドバイザーを務めたのち、ベルリン建築家協会やドイツ建築家連合の一員となった。1910年の大ベルリン計画コンペでは首席を獲得。
- (10) ドイツ人建築家。ベルリン北部のフロナーウの都市計画コンペで優勝。給水や排水など都市インフラに関する著書がある。
- (11) フランス人建築家、都市計画家。1895年にトゥールーズの芸術学校を卒業し、1903年バルセロナ都心部と周辺地区との都市連結計画コンペで優勝している。後に世界各国に都市計画技術を輸出するフランスユルバニスト協会の設立者の一人。
- (12) Brix の計画図面を見つけることは出来なかった。
- (13) 首都建設コンペの審議過程の詳細に関しては明らかにされておらず、また委員会議事録等の資料の所在も不明な現状では、精細な分析を行うことは出来ない。しかし本節では審査委員会がどのような基準で計画案を評価していたか、またそのことを通じて近代都市計画受容の過程を明らかにすることを目指しており、計画案の選定基準を考察することでその目的は達成されると考える。

引用・参考文献

- 1) Ali Cengizkan(2004), Ankara'nın İlk Planı 1924-25 Lörcher Planı, Ankara Enstitüsü Vakfı
- 2) Vacit Imamoglu(1996), "A Synthesis of Muslim Faith and Secularity: The Anatolian Case," Faith and the Built Environment: Architecture and Behavior in Islamic Cultures, Vol.11 No.3-4 p.227-234
- 3) 寺坂昭信編(1994), イスラーム都市の変容, 古今書院
- 4) 守田正志(2006), "メフメト2世のワクフ文書"および「1546年付けイスタンブル・ワクフ調査台帳」に見る15~16世紀イスタンブルの都市構造—オスマン朝初期におけるイスラーム都市の史的研究1—, 日本建築学会計画系論文集, No.600, p.254
- 5) 林佳世子(1988), "イスラーム都市における「イスラーム」—都市を支えたワクフ制度—", 創文, No.291, p.18-19 6) 前掲4)p.256
- 7) Zeynep Celik(1986), Değişen İstanbul, Tarih Vakfı Yurt Yayınları, p.45-48
- 8) 前掲1) 9) 前掲1)p.150 10) 前掲1)p.150
- 11) Carl Christoph Lörcher(1925), "Das Neue Regierungsviertel der Stadt Angora," Stadtebau Monatshefte für Stadtbaukunst Sadtisches Verkehrs = Park = und Siedlungswesen, No.20, p.144
- 12) Gönül Tankut(2000), "Jansen Planı: Uygulama Sorunları ve Cumhuriyet Bürokrasisinin Kent Planına Yaklaşımı," Tarih İçinde Ankara 2. Basım, T.B.M.M. Basımevi, p.301
- 13) Tanış Şenyapılı(1985), Ankara Kentinde Gecekondu Gelişimi, Kent-Koop
- 14) Öztürk Kazım(1994), Türk Parlament Tarihi, c.1, TBMM Vakfı Yayınları, p.598
- 15) Altındağ Belediyesi(1987), Ankara Kalesi Koruma Geliştirme İmar Planı Projesi, Ajanş-Türk Matbaacılık Sanayii A.Ş., P.68 16) 前掲1)
- 17) 東京都現代美術館(1996), 近代都市と芸術展—ヨーロッパの近代都市と芸術 1870-1996
- 18) Ankara Şehremaneti(1929), Ankara Şehrinin Profesör M. Jausseley, Jansen ve Brix taraflarından yapılan Plan ve Projelerine ait İzahnameler, Hakimiyeti Milliye Matbaası, p.109 19) 前掲17)p.136 20) 前掲12)p.311-312
- 21) Ankara Büyükşehir Belediyesi(1987), Ankara 1985'den 2015'e, Ajanş İletim 22) 前掲14)p.74